

53

オランダ大使ヴァン・グーリック博士と解馬新書

松尾 信一

信州大学

杉田玄白の「蘭学事始」150年記念大会が、蘭学資料研究会と日本医史学会の共催で昭和40年（1965）5月15・16日、東京大学医学図書館で行われた。当時の駐日オランダ大使ヴァン・グーリック博士の特別講演があった。“江戸時代の日本人は漢籍を読むとき、誤字と分っていても、その漢字を取りかえないで、欄外にこの漢字ではないかと記しています。その態度に大変感心しています。用事のある方は遠慮なく大使館を訪ねて来てください”とのことであった。

演者は菊池東水著「解馬新書」（1852年）の序文の「近世馬術叢説有り阿蘭鞭武爾林軟斯叔未兒……崎江訳官堀好謙訳述す」のオランダ人名を調査中であった。同年10月20日、港区芝罘の大使館の公邸を訪問した。一階のロビーで、上記について質し、二階の書庫兼書斎に案内された。部屋は中国風で、紅い漆塗の書棚に漢籍が充ちており、部屋に香が焚いてあった。文学についての説明を受け、さらに、ライデン大学に問い合せますとのことであった。演者は森銚三著「おらんだ正月」（角川文庫）を持参して、大使にお見せし、献上した。

11月上旬、大使から大封筒の書留便をいただいた。毛筆で達筆の和文の手紙と堀好謙訳「林軟斯・馬之部上下」の写本が入っていた。扉の裏に“松尾信一先生恵存 昭和40年10月30日 和蘭大使ヴァン・グーリック”と墨書で署名してあった。

その内容は28章からなり、性質、勢力、野馬、アメリカ及び他邦で野馬を捕へ狎らす法、嘶声、馬を相す、年齢を識す、行歩、養育、交接、毛更、食物、毒食、デース病、伝染病、区別、アラビヤ国産、印度国産、タルタリヤ国産、小形馬、ラヘンス国産、身体形状、馬腸、不嘔吐、胃中虫、頭中虫、鮓答、馬肉及び乳汁を食す。以上であった。

本書の冒頭は“和蘭起源1631年（日本寛永八年）彼邦の医師ベトリユースナールデウェーキ始めて馬の性質を検査し、差別を論じて記載せり”とある。原著者はオランダ・デルフト出身の Petrus Naaldwyck でラテン語の「馬医書」1631年を著している。また、「デース病」は鼻疽（人畜共通）のこと。

「馬腸」……六腸に分つ。十二指腸、空腸、廻腸は管薄く小腸という。……続く盲腸、結腸、直腸は管厚く潤大なる故に大腸という。盲腸は太き所下側に潤く張出し、状囊底の如く他に通じる道なし、故に盲腸という。長さ一尺五寸より二尺に至り、周囲は一尺に近し。結腸（糟粕此に至て専ら結成す、故に此名あり）は終は直腸に連続する。其の長さ二十一尺余、結腸の広さは一ならず、其の裏面許多の贅疣（膨起）の如き張出しあり、丸形の糞を形成す。小腸の長さ五十六尺、……大小二腸総て八十尺余の長さあり。胃の収閉筋広さは四寸の丸さ、十二指腸の収閉筋は五寸の丸さあり、これらの記述は「解馬新書」よりもはるかに詳細である。

その後の調査で、ヴァン・グーリック大使から戴いた「林軟斯・馬之部」は「西洋馬術叢説」六巻本の第四巻に相当すること、さらに、ショメール「厚生新編」の馬の部の一部も含まれていることが判明した。「西洋馬術叢説」と「厚生新編馬の部」の内容は、江戸時代で最も詳しい西洋馬学であることも判った。

ヴァン・グーリック大使は1910年オランダNijmegenの生まれ、1967年9月24日Hagueで死去され、享年57才、昭和40-42年駐日オランダ大使であった。1929年ライデン大学入学、卒業後ユトレヒト大学大学院に進学、1935年PhDを授与され、博士論文はHayagriva: The Mantrayanic Aspect of Horse-Cult in China and Japan: 馬頭明王古今諸説源流考 Leiden E.J. Brill (1935) 英文である。

その内容は、1章 大乘仏教の仏達 2章 インドの馬頭観音 3章 中国の馬頭観音 4章 日本の馬頭観音 5章 結論 馬の著しい肉体的特徴として、①豊かさ、②いななき、③敏速性など。ヴァン・グーリック大使には、Gibbon in China: 長臂猿考（英文）1967年刊: 日本語版 中野・高橋共訳: 中国のテナガザルなどがある。

※ライデン大学 W.J. Boot 教授に感謝致します。